

## 平成28年度 横浜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 平成28年9月2日（金）午後2時30分～3時30分
- 2 場 所 関内新井ホール
- 3 出席者 林市長、岡田教育長、今田教育長職務代理委員、間野委員、西川委員、長島委員、宮内委員
- 4 欠席者 なし
- 5 同席者 渡辺副市長、柏崎副市長、平原副市長、三上中区長、小林政策局長、大久保総務局長、鈴木財政局長、関山国際局長、西山市民局長、中山文化観光局長、林経済局長、田中こども青少年局長、鯉渕健康福祉局長、大熊環境創造局長、薬師寺都市整備局長、小林教育次長
- 6 会議日程
  - (1) 開 会
  - (2) 市 長 挨 拶
  - (3) 協 議  
横浜ならではの資産を生かした多様な教育機会の創出  
～子どもたちの「本物」体験の充実に向けて～
  - (4) 閉 会

小椋教育政策  
推進等担当部  
長

定刻となりましたので、ただいまから平成28年度横浜市総合教育会議を開催させていただきます。

私は、本日の進行を務めます横浜市教育委員会事務局総務部教育政策推進等担当部長の小椋でございます。よろしくお願いいたします。

これ以降着席して会を進めさせていただきます。

最初に、総合教育会議について説明をいたします。

総合教育会議は法により全ての地方公共団体に設置が義務付けられております。市長が主宰をいたします。昨年度の会議では「横浜市教育大綱」についてご議論をいただきました。「大綱」は本日の次第と論点・参考データとともに資料に添付しております。

本日は報道機関から撮影と録音許可の申し入れがされております。撮影についてはただいまの開会から、市長のご挨拶までといたします。また、録音は認めることといたします。撮影を希望される方、ここから撮影をお願いいたします。

それでは、会議の開会にあたりまして、林市長からご挨拶をいただきたいと存じます。

林市長

座ったままで失礼いたします。こんにちは。本日、教育委員会の皆様には、ご多忙の中、総合教育会議にご出席をいただき、誠にありがとうございます。また、報道機関の皆様、そしてこの暑い中傍聴席にお越しの皆様には、感謝申し上げます。

昨年度の会議では、私が大切にしている教育に対する考えを、皆様と共有することができて、大変有意義だったと思います。

「大綱」にもあります通り、私は、人を思いやる優しさと豊かな感性を育むためにも、子どもたちが実社会に関わり、多様な「本物」に触れる体験をすることがとても大切だと考えます。

ICTの発達により、今の子どもたちは、メールやSNSでコミュニケーションをとる、わからないことはインターネットで検索するなど、実際に顔をあわせたり体験しなくてもこと足りてしまう、一見便利な生活を送っています。しかし、一方で人と人との向き合い方や人とじかに触れ合うことの大切さを学んだり、また現実の世界の美しさ、情緒豊かな世界を体験する機会を逃しているのではないかと危惧しています。

これからの時代、人工知能や情報通信技術がどれほど発達しても、時代の課題を捉え、解決の道筋をつけていくのは人でございます。現実の世界の美しさと、人と人がじかに触れ合うことの大切さ、情緒豊かな世界を体験する機会を、すべての横浜の皆様方と一緒に、どのように作っていくかが重要だと考えています。

そこで、本日の総合教育会議のテーマは、「横浜ならではの資産を生かした多様な教育機会の創出～子どもたちの『本物』体験の充実に向けて～」といたしました。「横浜においてどのような『本物』体験をすることが望まれるか」、「“オール横浜”でどのように取組を進めるべきか」、の2つの論点をふまえて、皆様としっかり議論していきたいと思っております。

本日は、最初に子どもたちの現状と市の取組を紹介いたします。市の取組紹介までの進行は事務局に務めてもらいまして、その後、意見交換に移りたいと思っております。それでは事務局、よろしくお願いいたします。

小椋教育政策  
推進等担当部  
長

林市長、ありがとうございました。  
ここで、報道並びに傍聴の方をお願いいたします。  
これ以降につきましては、写真等の撮影はご遠慮くださいますようお願いいた  
します。  
議論に先立ち、教育委員会事務局から子どもたちの現状について説明をさせて  
いただきます。  
続けて、スポーツ、文化芸術、自然体験の3つの分野の次世代育成の取組と狙  
いについて、各局長からご紹介いただきたいと思います。  
なお、発表のスライドはスクリーンに映し出しますが、お手元に印刷されたも  
のご用意しておりますので、そちらもご覧ください。  
それでは、はじめに、小林教育次長から説明をお願いいたします。

小林教育次長

教育次長の小林でございます。私からは、本日の議題に関連する「横浜の子ど  
もの現状と課題」について、ご説明させていただきます。  
スクリーンのグラフをご覧くださいと思います。  
このグラフは、本市の小学校6年生と中学校3年生が、地域の行事に参加して  
いる割合を示しています。ご覧のとおり、小学校、中学校の両方におきまして、  
地域の祭りや清掃活動、あるいは防災訓練といった地域の行事に参加している子  
どもの割合がここ数年増えてきております。  
一方こちらのグラフは、「あなたは地域の人から学ぶ機会がありますか」とい  
う質問に対しまして、小学校4年生が回答した結果を政令指定都市全体の平均値  
と横浜市とを比較したものです。  
地域の人から学ぶ機会が「よくある」、「ときどきある」、と回答した子ども  
の割合が、全政令指定都市の平均と比べまして横浜市は低いという結果が出てお  
ります。以上2つのデータから、本市の子どもたちは、地域の行事に参加する機  
会は増えているものの、「地域の人から学んでいる」と感じている子どもの割合  
は「少ない」という課題が見てとれます。  
子どもたちがこれからの社会の担い手として成長していくためには、学校だけ  
で学ぶのではなく、地域・社会の中で様々な人と関わりながら学び、その学びを  
通じて、自分と地域・社会とのつながりを実感していくことが必要です。また、  
子どもたちにとって、その心を揺さぶられるような体験は、その後の生き方に大  
きな影響を及ぼすことも少なくありません。  
今日の総合教育会議におきまして、子どもたちの「本物」体験の充実に向けた  
“オール横浜”の取組についてご議論いただけることを、私ども教育委員会事務  
局といたしましては、大変ありがたく思っております。  
私からは以上でございます。よろしくをお願いいたします。

小椋教育政策  
推進等担当部  
長

次に、西山市民局長、お願いいたします。

西山市民局長

市民局長の西山です。よろしくをお願いいたします。  
市民局からははじめに、現在取り組んでいる「オリンピック・パラリンピアン  
と連携した事業」についてご説明をいたします。  
学校訪問事業、「横浜元気!!スポーツ・レクリエーションフェスティバル」へ  
の派遣、イベントへの派遣、この3つを実施しており、市民、とりわけ次代を担  
う子どもを中心に、心身ともに極限まで鍛えた選手たちが、オリンピックやパラ

リンピックを通じて得た感動や喜び、スポーツの素晴らしさなどを直接伝えることで、スポーツ人口の増加や、スポーツを通じた健康で豊かな暮らしにつなげていきたいという風に考えてございます。

まず、事業の概要ですが、学校訪問事業では、今年度は小学校34校、特別支援学校1校に、オリンピック、パラリンピアンを派遣する予定です。オリンピックというのはオリンピックの選手とオリンピックにかつて出られた選手を指します。パラリンピアンも同様です。

当日の流れとしては、全校児童に向けた講演で、ご自身の経験やオリンピズム、夢を持つことの素晴らしさ等をお話しいただき、5年生、6年生には実技指導を実施しています。

児童からは「本物の選手と交流できてよかった」、「速く走れるようになって気持ちよかった」などの声があり、また、先生方からは「児童たちの目の輝きが違う。これをきっかけに自分にあったスポーツを好きになってほしい」といった感想をいただいております。

パラリンピアンによる学校訪問事業では、パラリンピアンから全校児童に向けて講演を行い、5年生、6年生には、車いすバスケットボール体験を実施しております。写真左側は成田真由美さんの講演、右側は車いすバスケットボールを実際に体験した写真でございます。

児童からは「今までパラリンピックに関心がなかったが、関心を持つことができた。応援したい気持ちになった」、「何事にもあきらめずに挑戦することが大切だと感じた」などといった感想をいただいております。

また、毎年体育の日に開催している「横浜元氣!!スポーツ・レクリエーションフェスティバル」の周辺イベントとして、各区にございますスポーツセンターでオリンピックによるスポーツ教室を実施しています。

身近なスポーツセンターをオリンピックが訪問し、一緒に体を動かす機会は、スポーツへの意欲を高め、スポーツ習慣を定着させることにつながると考えています。

また、色々なイベントへの派遣ですが、横浜市で開催される大規模スポーツイベント等の開催に合わせて、オリンピックを派遣し、スポーツ教室やトークショーなどを実施しております。

ジュニアの大会にオリンピックをお招きするなど、競技に取り組んでいる子どもたちに夢や希望を与えるきっかけになっています。

今後も引き続き、こういった事業を推進していきたいと考えてございます。

続きまして、2019・2020に向けた今後の取組についてご紹介いたします。

まず、オリンピック・パラリンピアンと連携した事業については、今まで紹介しました通り、小学校を中心に展開してきましたが、今後は、中学校への派遣も拡充し、トップアスリートと触れ合う機会を提供できればと考えてございます。

また、東京2020大会では、英国オリンピック代表チームの事前キャンプが横浜で実施される予定です。本市は英国のホストタウンにも登録されていますので、英国との交流を進めていきたいと考えています。

具体的には、学校等で英国のスポーツや文化を学ぶ交流事業、英国への若手アスリートの派遣、事前キャンプ実施地域での地域交流などといった取組を考えております。具体的にはイギリスオリンピック委員会からご提案もいただいているところです。こうした事前キャンプを契機に、教育委員会と連携しながら、子どもたちの国際交流体験や学び合う機会を創出したいと思っております。

本市では、東京2020オリンピック・パラリンピックの前年にラグビーワールドカップ2019決勝戦が開催されます。

世界的なスポーツイベントである両大会が、2年にわたって本市で開催されることは子どもたちにとって得難い経験になるとともに、両大会を契機とした次世代育成の絶好の機会であると考えます。

先日も、左側の写真ですが、「横浜国際総合競技場」でラグビーの五郎丸歩選手らによるタグラグビー教室が開催され、子どもたちにラグビーの楽しさを伝えました。子どもたちがトップアスリートと触れ合い、直接学ぶ機会を充実させるため、また、2019年に向けた機運醸成のため、今後、ラグビーのトップ選手の小学校派遣も予定しております。

また、9月10日には横浜国際総合競技場で十数年ぶりに日本ラグビーのトップリーグを行います。神奈川県の小中高校生は無料招待ということで日本ラグビー協会から初めての取組もご提案いただいていますので、是非ご覧いただきたいと思えます。またとない機会である両大会の開催によって、世界各国の人々と交流し、トップアスリートを身近に感じることは、子どもたちにとって忘れられない経験になるとともに、成長や学びにつながると思えます。

2002年のFIFAワールドカップの際にも、大会に関わることで子どもたちの心にレガシーが遺ったように、ラグビーワールドカップ2019や東京2020オリンピック・パラリンピックでも、子どもたちに良いレガシーを遺せるよう、次世代育成の観点からも取り組んでいきたいと思えます。

市民局からの発表は以上でございます。

小椋教育政策  
推進等担当部  
長

ありがとうございました。次に、中山文化観光局長お願いいたします。

中山文化観光  
局長

文化観光局長の中山でございます。

本日はプレゼンの機会をいただき、ありがとうございます。

ここからは着座で進めさせていただきます。

本日は、文化観光局で取り組んでいる「クリエイティブ・チルドレン」の取組をご紹介します。

はじめに、クリエイティブ・チルドレンとは何か、についてでございますが、当局の次世代育成施策のコンセプトでございます。

ポイントは2点です。

まず、あらゆる世代がクリエイティブになりえる機会を提供することで、社会課題を解決するトリガー、きっかけにすること。「創造性」というのは、複雑化する現代において、様々な社会課題を解決するキーになると考えております。

2点目は、クリエイティブであることは、子どもたちだけでなく、あらゆるライフステージに応じた施策にすることでございます。このクリエイティブ・チルドレンの取組の中から、本日は特に子どもたちを対象にした取組と効果を2つご紹介いたします。

まず、配付資料にも記載のありました「芸術文化教育プログラム」です。ダンスや音楽等の分野で活躍するプロアーティストが、実際に学校に行き、授業を行います。

先生方とご相談しながら、各校オーダーメイドのプログラムをつくっており、年々、取組数は増加しております。27年度は合計で136校、338回の開催でございました。子どもたちの反響は大変大きく、アンケートでは「自分から楽しんだり、発見したりしたことがあった」が81%、「また授業を受けたい」は96%でし

た。コメントを見ても「人前で声を出す恥ずかしさがとれた」、「人を楽しませるにはまず、自分が笑うことが大切」など多様に感じ取っている様子がわかります。また、先生方の反響では、子どもたちに力がついたと思う項目として、「表現力」「感受性」が突出して高くなっております。表現力に関する先生からのコメントの一例として、「日頃、ひっこみ思案の子ども、身体も心も開放されているようだった」ということ、また、感受性に関することとしては「鑑賞する表情が生き生きとし、小さな変化や、様々な変化にも気付いていた」などがございました。子どもたちが「本物」に触れることの影響の大きさを、プログラムを通じて、先生方も感じてくださっていると思います。

次に、MICE施策における次世代育成です。

MICEとはMeeting、Incentive Travel、Convention、Exhibition & Eventの略でございます。横浜で開催される国際会議等のMICEにおいて、児童生徒を対象にしたサテライトイベントなどを実施しております。写真は、昨年6月、世界各国800名の医師等が参加した学会の際、スーパードクターに、高校生等を対象として、世界最先端がん放射線治療についてお話しいただいたときの様子です。

生徒たちからは、「最先端技術をすみずみまで学ぶことができた」などの感想が寄せられるとともに、後のメールのやりとりで、受講をきっかけとして、2名の高校生が実際に大学医学部に進学し、非常に先生方のお話が役に立ったとのコメントを頂きました。

今回、ご紹介した取組は一部ではありますが、子どもの頃に見たり、触れたりした「体験」、そこから得た「何か」は、多様な感性や創造性を育み、子どもたちが成長する過程において、必ずや大きな財産、宝になると信じております。

もっと多くの子供たちが様々な「本物」に触れる機会を創出できるよう、文化観光局としても、引き続き積極的に取り組んでまいります。

ご清聴、ありがとうございました。

小椋教育政策  
推進等担当部  
長

ありがとうございました。最後に、大熊環境創造局長お願いいたします。

大熊環境創造  
局長

環境創造局長の大熊でございます。どうぞよろしく申し上げます。  
座って説明させていただきます。

環境創造局では、「生物多様性の保全」と「地球温暖化対策」を基軸といたしまして、この視点をあらゆる施策に盛り込みながら、「かけがえのない環境を未来へ」継承することを目的に、環境施策に取り組んでいます。

将来にわたってより良い環境を持続していくためには、市民・企業の皆さんの主体的な取組が大切でございます。

そして、その取組の輪を、子どもたちへ広げていくことが非常に重要です。環境創造局の運営する様々な施設では、子どもたちが自然に触れ、環境について学び、考える機会を提供しています。

左の写真は「環境活動支援センター」での農体験の様子でございます。右の様子は森の中で虫などの名前を当てたりするネイチャーゲームの様子でございます。次の写真です。市民の生活と環境を支える下水道の役割について学べる水再生センターの見学の様子でございます。こちらは動物園での飼育体験や講座の様子でございます。このほかにも、多くの体験型プログラムがございまして、学校の授業だけでなく、グループや個人での参加ができるものもあります。

これは「こども『いきいき』生き物調査」でございます。小学校全校の5年生に調査票を配布いたしまして、家や学校の近くで見たり、鳴き声を聞いたりした生き物を報告してもらおう取組であります。調査を通して、子どもたちに身近な自然や生き物への関心を高めてもらうだけでなく、横浜市全体の生き物の基礎データを共有することができるという一石二鳥の取組でございます。

これは「こども『エコ活。』大作戦！」の取組です。小学校全校の3年生から6年生までにエコライフチェックシートを配布いたしまして、夏休みに家庭や地域で環境行動に取り組んでもらうものがございます。この取組に市内企業が応援をいただきまして、市内企業の協賛金によって、タジキスタン等の開発途上国で果樹植樹に繋がっているといった地球規模での取組に参加しており、子どもたちに考えてもらえる非常に良い機会になっています。

これは、市内の小中学校や地域の皆様の元に出向きまして、講義を行います「環境教育出前講座」でございます。講師には、市職員のほかに、市民団体や企業の皆さんにも、ご登録いただいております。

横浜市は、「エネルギー循環都市」の実現を目指しておりまして、子どもたちや親子を対象に、風力発電所の施設見学、F C V（燃料電池自動車）の試乗などを行っています。資源に限りがあることや、再生可能エネルギーや未利用エネルギーを活用することの大切さについて知ってもらい、具体的な行動や科学的な視野を広げることを期待しています。

来年3月からの「第33回全国都市緑化よこはまフェア」でございます。お手元に緑化フェアのチラシがございますので、後ほどご覧いただければと思います。この緑化フェアでは、メイン会場は2つございまして、1つは「山下公園」や「港の見える丘公園」など都心臨海部の「みなとガーデン」と、もう1つは、この図にございます、「ズーラシア」に隣接する郊外部の「里山ガーデン」でございます。

里山ガーデン会場では「緑豊かな横浜」をコンセプトに、里山の魅力、楽しみ方を身近に体感できるよう、自然の樹林を使ったアスレチックや、デイキャンプ体験などを展開してまいります。

これまでご説明させていただいたプログラムに参加した子どもたちからは、「私は虫なんかいなくなれと思っていました。けれど虫が森をつくっていると考えると見直しました。」、また「一つがだめになると、すべての生き物が育たなくなるので、緑を増やし、生き物が住める環境にしたいです。」、あるいは「僕たちの住んでいる周りにはたくさんの生き物がいるから、生き物を大切にして、これからも自然のことを考えていきたい。」といった感想が寄せられています。

子どもたちは、身近な自然体験や生き物に触れることを通して、自然や環境への理解や関心を深め、知識や豊かな感性を身につけていきます。

これからも、教育委員会と連携しながら、子どもたちに、より豊かな体験の場を提供し続けていきたいと考えています。説明は以上でございます。

小椋教育政策  
推進等担当部  
長

ありがとうございました。それでは、「横浜市総合教育会議運営要綱」第2条第1項にもとづきまして、会議の議長を市長にお願いしたいと思います。  
林市長、よろしくお願ひいたします。

林市長

ありがとうございます。ただいま、子どもたちの「本物」体験に関連した取組について、代表して3人の局長から発表していただきました。  
それでは、委員の皆様からご意見を頂戴したいと思います。まずはじめに、今田委員からお願いします。

今田委員

トップバッターということでございますけど、今いろいろお話があって、新しいお話もいろいろあったのですが、今回の議題が「横浜ならではの資産を生かした多様な教育機会の創出」ということで私は自分が言うことはこれしかないな、と決めたものがありまして、それは横浜の歴史資産を生かすことです。歴史資産は古いものではありませんが、歴史資産を今一度見つめなおす、検証する中で若者に勇気を与え、元気を与えてくれるものになるのではないかと考えております。横浜は「モノ」のはじめを語られることは非常に多いです。例えばアイスクリームやビールといったものです。それ以外のこととして、「象の鼻パーク」ですが、明治4年に「岩倉使節団」が、これは政府の役人の皆さんと、留学生、総勢100人近く、若い8歳の津田梅子も一員としてあそこから旅立ったという開国の地であります。岩倉具視と木戸孝允、大久保利通などが船に乗って象の鼻から出て行った様子が描かれている、歴史の教科書で目にするカラフルな絵があります。象の鼻パークには、「象の鼻地区の変遷」という解説板はあるのですが、是非あのあたりに、この絵のカラーのレリーフか何か大きいものを置いて、それを見た人が近くの「横浜開港資料館」で同使節団の旅を検証する機会を作るといのはいかがでしょうか。使節団の彼らは1年9か月もの旅で、これからの日本を作っていく壮大な日本近代化の青写真を描いた。旅については、佐賀の久米邦武さんという方が随分立派な記録をつづっていますが、ここから学ぶものがいっぱいある。当時の若者が向こうに行って、「本物」体験に触れる、大変感動した、チャレンジ精神を掻き立てられる、こうした経験をここで見つめなおすということも大切なのではないかと思います。是非、来年度予算に、そんなに予算のかかる話ではないと思いますので、それはまたある意味、観光名所にもなりうるのではないかなと生意気にも思っています。いずれにしても、岩倉遣欧使節団が横浜から出て行ったのだ、145年前にここから出て行ったのだ、ということを若者が肌で感じる、きっとこれは「本物」体験の充実に向けて、何か資するものがあるのではないかなと思っています。

それからもう一つは、「大倉山記念館」の話なのですが、こちらは市長もご覧になったことがおありかと思いますが、外はギリシャ風で西洋の建築を模しておりますが、中に入りますと木組みで造られている東洋の様式となっております。この建物は東西両方の精神が融合した文化の振興を図ることを目指した「大倉精神文化研究所」の本館として建てられたものであり、横浜市も関与し、積極的に生かしてもいいかなと思う。これからのグローバルの時代、これから外国に出ていく若者や、外国から来る若者にもいろいろ見てもらい、文化の奥深さを感じられる機会に活用することもいいのではないかな、と思います。あまり長くなってもいけませんので、この辺で終わりにさせていただきます。

林市長

今田委員ありがとうございました。今のご意見、大変素晴らしいと思います。実は、私、お客様や観光客などのいろいろな方に、横浜に何回も来ていただくためにはどうしたらいいのか、ということを考えております。例えば、他の自治体の方にお話を伺うと、城下町や門前町があるところは、観光名所になりますが、157年前の開港当時は半農半漁の寒村だった横浜にはありません。今田委員のおっしゃった「モノはじめ」「ことはじめ」は横浜の強みで、記念碑はたくさんあります。しかし、文明開化は観光資源になりにくく、まさに岩倉使節団や「津田塾」の津田梅子さんは時々大河ドラマで取り上げられますが、中まで踏み込んだものはなかなかございません。特に横浜開港資料館や「横浜みなと博物館」に子

どもたちが見に行く機会はあるのか、これについては、教育長、いかがでしょうか。横浜開港資料館などの施設に、子どもたちが座って、先生から話を聞いたりするといった取組はあるのでしょうか。

岡田教育長

小学校4年生で言いますと、横浜の学校では必ず「吉田新田」を学びます。それから開港の歴史は小学校1年生から横浜市歌から学びます。その時に、いろいろな調べものをしていく時に、横浜開港資料館や「横浜市歴史博物館」に行くことも1つです。ただその時に展示されているものが子どもたちの勉強にぴったり合うものとは限らないので、そこはこれから少し工夫が必要かなと思います。

林市長

そうですね。例えば、開港記念日に学校をお休みにしますよね。その日は、無料で施設を開放して、横浜の歴史や文化に親しんでもらうようにお話をしているのですが、カリキュラム作りに関わるので、そこまでは踏み込んで申し上げられません、授業の一環で連れて行って見せることも必要です。「横浜都市発展記念館」や委員のおっしゃってました大倉精神文化研究所も素晴らしい施設ですが、現状ではどれだけの人来ていただいているのかと少し心配しているところでございます。

文化観光局長にお伺いしたいのですが、今、アーティストを学校に派遣していただいている中で、西川先生からも後ほどお話があるのかなと思いますが、子どもたちが一堂に会してオペラやバレエを見るところという場面はあるのでしょうか。

中山文化観光局長

はい、ございます。

林市長

どのような場面ですか。

中山文化観光局長

これは先生方と相談をしながら、まず体験型にするのか鑑賞型にするのかということからお話をさせていただいております。鑑賞型を選んだ場合ですと、ダンスがいいのか、演劇がいいのか、オペラがいいのかあるいはミュージカルがいいのかといったところでお話をさせていただきながら、ご希望に沿った形で実施しております。

林市長

ありがとうございます。このことについてはまた後で、触れたいと思います。どうも今田委員ありがとうございます。それでは間野委員、お願いします。

間野委員

スポーツの「ことはじめ」がありまして、日本で最初にできた多種目多世代総合型地域スポーツクラブというので「横浜カントリー&アスレチッククラブ」というものがあります。これは現存しています。また、テニスのサークルの、「横浜インターナショナル&テニスコミュニティ」もできています。このようなものも横浜ならではの「ことはじめ」で重要な資産と言えるかなと思います。先ほど市長がおっしゃったベンチャー精神、先がけといったもので、是非横浜の子どもに知ってもらいたいと思います。

リオのオリンピックが終わりまして、史上最多の41個のメダルを獲得しました。たぶん連日、子どもたちも夜更かしをしてはいけないと思いながら、夏休みだから、まあいいかなということで、親御さんと一緒に金メダルのシーンをたくさん見ていたのかなと思いますが、横浜ゆかりのメダリストがなんと8人いると

ということがわかりました。オリンピックに出るだけで「本物」なのですが、「本物の中の本物」がこの横浜に8人いる、こんな方々に是非横浜の教育にも関わっていただきたいなと思っています。来週7日からパラリンピックが始まりますが、まだメダルはもちろんわかりませんが、出場者の中でも横浜ゆかりの選手が9人もいるということを知っていますので、オリンピックとパラリンピックの「本物の中の本物」の人たちに横浜の教育に携わって欲しいなと思います。既に西山市民局長からもありましたが、こういった事業を展開していて、中学校まで広げていくということなのですけれども、子どもは28万人弱いるわけですので、まだまだ機会が不足しているの、横に広げていきたいと考えています。

オリンピックはメガスポーツイベントではなく、「オリンピズム」という哲学を普及させるためのオリンピックムーブメントの一環です。「オリンピズム」というのは肉体と意思と精神の資質を高めてバランス良く結合させる生き方の哲学です。体だけでもなく、心だけでもなく、バランス良く結合させる。こんなこともスポーツをして楽しいだけではなく、心の問題も含めてアスリートたちには伝えてもらいたいと思います。実際オリンピックに限らず、横浜には「熱闘倶楽部」、プロスポーツチームが4つもありますので、そういったプロスポーツ選手たちにも参加をしてもらいながら、協力してもらって、本当にその「本物」体験をしてもらいたいと思っています。

市長が就任された当時、2009年ですけれど「世界こどもスポーツサミット」というものをやらせていただきまして、「世界こどもスポーツ横浜宣言」というものを作りました。日本語を英語とフランス語に直して、子どもたちを2人連れて私もローザンヌのジャック・ロゲ会長の元に届けました。あの時の30人、横浜だけでなく日本代表の子どもたちのキャプテンというものを作ったのですが、彼らも普段外国の子どもたちと接したりすることがない中で、とても貴重な体験ができました。これも横浜初の「ことはじめ」でもあります。IOCが公認したそうしたイベントでは初めてでした。このようなことも是非つなげていきたいと考えております。是非“オール横浜”でスポーツを通じた様々な機会を用意したいと思っています。以上です。

林市長

間野委員ありがとうございました。私も「世界こどもスポーツサミット」は非常に有意義だったと思います。そのような機会があれば横浜でやっていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

それでは西川委員お願いします。

西川委員

今、間野委員からオリンピックの話がありましたが、本当にこの夏はオリンピックや高校野球等で湧き上がりまして、たくさんの勇気やあこがれを抱いた子どもたちも大勢いたのではないかと感じております。横浜の子どもたちもそれに負けておりませんで、運動系に、文化系にと色々な分野で大活躍をされており、とても嬉しく思っております。小学校、中学校、高等学校の身も心も成長する時期の子どもたち、その大切な子どもたちの健やかな成長のためには、豊かな感性、豊かな心をしっかり育むことが不可欠であると考えております。その豊かな感性、豊かな心を育むためには、豊かな情操を養うことがとても大切なのではないかなと考えております。私からは、質の高い文化芸術に触れる機会の創出というテーマで、芸術文化教育の面からお話をさせていただければと思っています。

小学校低学年から質の高い音楽や舞台芸術に触れるということは、人を思いやる心と感性を育み、また、鑑賞マナーを身に付ける大変良い機会になっていると思っています。現在、横浜の子どもたちの心を豊かに育てたいという強い願いか

ら、「心の教育ふれあいコンサート」が実施されております。この事業は多くの皆様方にご理解をいただき立ち上がりまして、平成10年度から始まってございますが、この「心の教育ふれあいコンサート」は、心の柔らかい時期の小学校5年生、あるいは小学部5年生の子どもたちを対象に、またその前後の子どもたちを対象にした、横浜の宝の1つであります、大切な資産であります「横浜みなとみらいホール」を使用させていただきまして、地元の「神奈川フィルハーモニー管弦楽団」のご協力で実施されている音楽鑑賞会でございます。子どもたちは身を乗り出して、そして楽しそうに聴き入っております。このような感動や憧れは夢につながるのではなかろうかというように感じております。心や生活に潤いを持って、横浜で育って良かったなと誇りを持ちながら、将来、大いに世の中で貢献できる良い大人になって欲しいなと願っております。

先ほど文化観光局長からお話がありましたが、「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」が実施している「芸術文化教育プログラム」につきましては、私も参加させていただきました。ピアニストでございましたけれども、きちんと調律師の方についていただき、1曲終わると調律をするという良い環境の中で、学校に「本物」の方が来てくださって、子どもとすぐ近くで触れ合う、これはすごく大きな感動を与えているなど感じ、普段できない体験だなと感じております。これからは是非続けていただきたいと感じております。

実は、横浜に「本物」のオペラやバレエといったものを鑑賞できるホールがあれば大変理想的だと思うのですが、横浜みなとみらいホールや「横浜能楽堂」といったたくさんの文化施設がございますので、是非それらをもっともっと活用して、子どもたちに良い体験をさせていただきたいと感じています。またこれは少し違った角度からにはなりますが、現在、横浜の小学校の音楽会や中学校の合唱コンクールなどとても盛んです。そしてこの教育的効果も非常にありますし、素晴らしい活動だと思っております。ただ、残念なことに、その子どもたちの表現活動の発表の場の確保に苦慮している現状がございます。そこで、市外の施設や音響施設の整っていない体育館で実施をしている現状がありますので、できれば横浜の児童生徒が校種別に一堂に会してそれぞれの演奏を聴き合うとか、保護者に聴いていただくといった励ます機会ができるといいなと思っております。また、市内の文化施設の優先利用ができれば、学校はもっと活動が広がるのではないかなと思っております。余計なことかもしれませんが、新市庁舎ができた時に、子どもたちの作品を展示するとか、発表する機会を織り込んでいただけるとありがたいかなと思っております。横浜の子どもたちが健やかに、そして心豊かに成長することができますよう教育委員会だけでなく、引き続き関係局の皆様方のご協力をいただきながら、一緒に進めていただきたいと強く願っているところでございます。

林市長

西川委員ありがとうございました。

横浜市は神奈川フィルハーモニー管弦楽団と提携をして、全小学校の4年生から6年生の間に1回、全ての子どもたちに横浜みなとみらいホールで神奈川フィルの演奏を鑑賞してもらっています。先ほど私が文化観光局長にお尋ねしたのは、残念ながら音だけで、オペラやバレエを一堂に見る機会はないということです。他の国際都市ですと大きな劇場がございますから、小さな頃からオペラやバレエを見る習慣があります。横浜には横浜能楽堂はございますが、伝統文化や歌舞伎、相撲などは小さい頃から見ないと、見る習慣がつかないと思います。総合芸術のようなものを、もっと子どもたちに見せていきたいなと思っております。そのような意味では、歴史的に劇場を作ってこなかったということが非常に残念

で、関係機関と話し合いをして、是非、民間の方からもご協力をいただいて、総合芸術を上演できるような劇場を作っていけるといいなと思っています。本当にありがとうございました。

次に、長島委員は地域で様々な活動をなさっていると思いますけれどもご意見いかがでしょうか。

長島委員

よろしく申し上げます。「本物」体験がどんなに素晴らしいのかということについては周知の事実だと思うのですが、学びのなかでは、主権者教育や起業家教育やキャリア教育などというような学びがあって、学びの方法は違っていても目的は同じなのだと思います。地域の中で、異年齢の子どもたちが、異年齢の活動であったり、バリアフリーな活動を経験します。その子どもたちは、自分より年上の先輩たちがまぶしく見えて、自分がいずれそういう風になりたい、社会に出たらこういう風になりたいと思える1つのツールが地域での異年齢であったり、異校種の子どものたちとの触れ合いの経験だと思います。それには、大人たちが子どもに真剣に向き合っているのかどうか、接する上で必要不可欠なものは、その大人自身の経験値なのではないかと感じています。大人自身が「本物」に触れてきたかどうか、ということが問われているなど事実、活動に直面して思っています。それは教職員でもそうですし、地域の大人もそうです。子どもたちが自立して生きていく力とか、豊かな感性を育む環境を作るのはやはり大人の責任です。その中でそのような「本物」体験の創出に向けて、より良い手法であったり情報提供を出来る場が必要になってくると考えています。

先日、横浜市教育委員会で行っている「はまっこ未来カンパニープロジェクト」という起業家コンテストがあるのですが、そこに参加をしてきました。その中で、すごく感性豊かな大人の力であるとか、教育に直接関わっていない方が、プロジェクトに思いをはせることであるとか、そういう思いなどを大人同士がどう感じとれるかということが大事だなとつくづく感じました。もちろん、企業・団体などの横浜の資産と横浜の持っている教職員と職員の知的財産をフルに活用しない手はないのではないかなと強く思っているところです。その総合的な役割を果たすためには、かつては教職員の学びの場として「教育文化センター」がありました。今はありません。そのような状況下で、教職員だけではなく子どもと教職員、あるいは教育に関わらない者でも一緒に学び合えるようなスペースは必要なのではないかなと強く感じています。子どもたちの顔がそこに見えて、その感性を伝えてあげるためには、やはり「本物」体験を共有し発信できる、大事なことは何かと言える場がある、ということではないかなと思っています。そうすれば、ベンチャー精神でしょうか、何に対してもベンチャー精神を持って、私の場合は「食」をツールにそのようなことを語っていますが、どんな専門性を持っていても、目的は一緒なのではないかなと思っていますので、そのようなスペースがあればいいなと心から思っています。よろしく申し上げます。

林市長

どうもありがとうございました。私も、教育文化センターのことはずっと考えております。やはり人づくりが非常に大事で、そのようなことを子どもたちに伝えるためにも、大人たちがしっかり学び続けなければいけないというご意見だと思っています。ありがとうございます。

以前から、横浜市は自治体同士で職員の交流をしていましたが、今は、民間企業との交流も、非常に盛んに行っております。スーパーマーケットを運営している会社では、売り場に立たせていただきたいとお願いをすることもあります。このような取組も学びの1つではないかなと思います。ありがとうございました。

宮内委員は民間にいらしたので、いろいろなご意見があるのではないのでしょうか。

宮内委員

4月に教育委員を拝命いたしまして、教育問題は大変で矛盾のつぼだなど痛感しています。同時に、希望の玉手箱だとも思います。横浜市教育大綱を読ませていただきまして、実に良く練れているなと思いました。先ほど市長がおっしゃった思いやり、「感性」、「グローバルな生き方」、生き方というよりも、生きる、生き抜くと言いますか、どうやってたくましく、なおかつ優しく生きるかということを目指していて納得感があります。

先週、「横浜子ども会議」に参加しましたが、テーマがはじめのない子ども社会を作ろうというものでした。各グループの研究発表、討論の内容の中でいじめをなくすためには「違いを尊重しよう」、「違いがあってもいい」、「違いは当たり前ではないか」ということを言う小学生が多かった。横浜のアセットには今田さんがおっしゃるような開港時代の英雄たちが出ていったところもあるし、横浜港には国際客船ターミナルもありますが、隠れた横浜のアセットはこの多様性、違いを尊重し合うチャンス、多様性の先駆けであることかもしれません。

いじめというのは人間の性でもありまして、これは大人の世界でも、教職員の世界にもあるのですが、横浜では大人も子どももいじめをなくしたいと思います。横浜は歴史的に外国に開かれているのです。横浜には既に多くの外国籍の児童生徒もおります。また、今後外国籍の児童生徒は増えていくのだらうと思いますが、つまり「違い」がますます私たちのアセットになっていくのです。ならばこの「違い」をどうやってプラスにするのか。横浜のイメージを例えば「違いを尊重する横浜」にしてみる。長野県をよく教育県といいますけれども、私は横浜こそ教育都市だと、それも「開かれたいじめのない都市、横浜」を目指す運動をしていったらいいのかなと思っております。

ここからは少し飛躍をするのですが、アイデンティフィケーションを創っていくということは非常に難しい作業なのですが、後づけでもいいので何かやってみたい。その時に子どもたちが体を動かして、声を出して、そしていろいろと議論をしてわくわくするようなものが何かないかなと。オペラ鑑賞、バレエ、これは少し上等すぎるかなと思います。私は大好きなのですが。ならば、お金もかからずにコンサートホールも要らない、ダンスの振り付けコンテストはいかがでしょう。 「Y-Step」とか「Y-Pop」といったものを小学校や中学校でブームにして、コンテストをして、そしてその「Y-Step」なるものをインターネットを活用してコンテストをする。横浜のどこに行っても「Y-Step」「Y-Pop」の話題にする。イメージですが、違いを尊重した変奏曲というか、編曲を行う。例えばコリアン風や中国風のメロディーに編曲しそれを競う。また、フランス語ドイツ語等の言葉に直していくと違う言葉をいじりながら、夏休み、または休み時間などの遊びを交えながら、一層「違い」をリスペクトするような運動ができればこれはすごいことかなと思います。横浜というのはたぶんこれら諸問題の解決の最先端都市になるのではないかなと思います。教育大綱を読みまして、いろいろな問題を考えましたが、今一番大事なのは、やはりいじめのないところのことかなと思います。

林市長

ありがとうございます。今宮内委員がおっしゃった「Y-Step」など、とても素敵ですね。学校では、Hip Hopなども授業に取り入れていますし、オールジャンルの「Dance Dance Dance@YOKOHAMA」も2012年から実施をしております。それから、「赤レンガ倉庫」でのダンスコレクションを長く続けているような土壌があ

ります。今のお話もとても楽しいと思いますので、文化観光局でも、新しく検討していただければと思います。ありがとうございます。

1時間という会議なので、大変短いのですが、今教育委員の先生方からお話を頂戴しましたが、教育長何かご意見いかがでしょうか。

岡田教育長

お時間いただきましてありがとうございます。私からは1つだけです。環境創造局長からいろいろな自然体験のプログラムをご紹介いただきましたが、お手元のデータ集の10ページを見ていただきたいのですが、そこに簡単なデータを載せさせていただきました。実は自然体験を豊かに経験すると、子どもたちの自己肯定感、あるいは、正義感を養っていけるということがありまして、今ルールを守る、マナーを守る、モラルを守るといったことを教えるのは社会的にも難しくなっている中で、子どもたちにこれを考えてもらいたい、いろいろな要求、ニーズが学校に寄せられるのです。実は子どもたちの体験そのものがそういう心を作っていくということを少しご理解いただきたいなと思ひまして、データをつけさせていただきました。今一番大事な就学前の時期にどのくらい自然体験ができるか、あるいは就学期になってから、放課後に、あるいは長い夏休みや春休みにといった時にたくさんのプログラムが用意されていて、いろいろな自然体験ができればとても素敵だなと思っています。実は子どもたちは学校にいる時間よりも学校外で生活する時間のほうが圧倒的に長いです。また、人生の中では、その時間はもちろん大事な時間なので、しっかり教育はしていきますけれども、子どもが育まれる時間、体験、そういうものは社会にたくさんあると思いますので、是非地域の方や団体の方のお力もいただきながら、それから行政のたくさんの施設、そのようなものを活用して、もっともっと子どもたちが自然体験できるプログラムを提供できたらと思っています。是非、区役所の方でも団体やそのような活動をする方たちに、子どもたちのためなら行政機関と協力してもいいかなと思えるような取り組みやすい環境を作ってくださいするための支援をしてくださればいいなと思っております、是非、市の行政部局の方にも協力をいただきたいと思います。

林市長

ありがとうございました。最後に岡田教育長が遠慮しがちにおっしゃられたことは、大切なポイントです。今日は「本物」体験ということで委員の皆様にお伺いをしましたが、本当に皆様にはご理解賜っていて、実際に事業に取り組む局長からの発表もありましたけれども、関係区局との連携も非常に大切だと考えています。どうしたら取組が進められるか。課題はやはり予算で、これを有効に使うことが大切です。ファシリティーマネジメントという言葉がありますが、急速な都市化の進展にあわせて集中して建てられた公共施設、とりわけ学校施設の老朽化が進み、これから、予算を平準化して建て替えを進めていく必要があります。しかし、ここで忘れてはいけないことは、やはり心の問題なのです。子どもたちに「本物」体験をしてもらうために、もう少しお金をかけてもいいのかなと痛切に感じています。皆様のご意見をさらに伺い、かけるにはしっかりお金をかけていきたいと思ひます。横浜市は、と言いますか、日本全体が、先進国に比べて施設の老朽化などにお金を使うことが多く、教育にかけるお金が非常に少ない状況です。文化庁の予算も、文化財の修復や保全の関係にお金がかかり、実際の文化事業に予算が回せていないといった、気の毒な実情もあります。そうしたことも含めて、大切なのは中身の問題です。私も大変心を痛めておりますが、イタリアで地震があったように、いつ来るともわからない災害にもお金がかかりま

す。しかし、大事なことは、私たち大人が子どもたちと生き生きとコミュニケーションを取りながら、子どもたちの心を育てていくことです。その基礎になるのは文化芸術、スポーツだと思います。そして今回、2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開かれます。間野委員がご専門でございますけれども、横浜市では、サッカー競技が開催され、正式には12月末に決まりますが、「横浜スタジアム」が野球・ソフトボールの主会場の予定地に選ばれました。その前に、2019年のラグビーワールドカップもあります。こうした大変大きなチャンスを通して、なんとしても、平和の祭典として、皆さまとご一緒に、子どもたちの心を育てる機会にしていきたいと思えます。

今日は本当に短い1時間でもございましたけれども、生き生きと心豊かな子どもを育てるために“オール横浜”として「体験型」で「本物」に触れる機会をつくっていくことの重要性を再確認させていただいたことが大きな収穫だったのではないかなと思えます。この会議を機に、更に深掘りをしていければと思えますので、今後とも先生方にはよろしくお願ひしたいと思えます。

本日はここで一旦終了とさせていただきます。

それでは事務局にお返しします。

小椋教育政策  
推進等担当部  
長

市長、教育委員会の皆様、本日はありがとうございました。

本日の会議の議事録につきましては、この後、事務局で作成し、ホームページにて速やかに公表したいと思えます。

以上をもちまして平成28年度横浜市総合教育会議を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。